

褚遂良

(596—658)

隋の開皇16年に錢塘(現在の杭州市)で生まれた。

名は遂良、字は登善。河南郡公に封ぜられたので褚河南と

も呼ばれた。唐の太宗、高宗に仕えた高官。虞世南の弟子。品行方正にして硬骨、清廉潔白な人格と伝えられる。褚氏は河南から江南に移住し代々南朝に仕えた名門一族。祖父の褚玠は陳に仕えた高官で、廉直な人柄と伝えられ、退官後は自給して清貧に甘んじた。博

学で文章に秀で二百篇余の著書がある。父の褚亮も博学で詩文にすぐれ、陳・隋・唐に仕えた、唐では弘文館学士であり、虞世南・歐陽詢の親しい友人であった。褚遂良は618年22歳のとき唐の役人になった。虞世南が秘書省の長官のころ、褚遂良は秘書省のエリート青年官僚であった。貞觀10年(636)「起居郎」(皇帝の言行記録官)となる。虞世南、歐陽詢の死後、一人の後を継ぎ「侍書」になる。「侍書」は皇帝の秘書官で王羲之などの書跡を太宗とともに鑑定した。貞觀17年(643)太子廢立事件の後、褚遂良が推薦した太宗の第九子の晋王・治(後の高宗)が皇太子になると、「太子賓客」となり皇太子の教育にあたり、その後中書令(勅書担当官)、尚書右僕射(宰相)にまでのぼりつめた。永徽2年(651)李勣らと永徽律令を制定した。永徽6年(655)高宗による皇后廢立事件がおこる。廢立に強く反対した褚遂良は、高宗により潭州(長沙)、桂州と左遷された。その後(658)、武皇后により愛州(ベトナム北部)に左遷され、この年この地で病没した。二人の子も愛州に流される途中で殺された。

虞世南に書画鑑定の知識から書法まで一切を学んだ後、王羲之の書を学び、虞世南の南朝風と歐陽詢の北朝風を融合し、隸法を取り入れた独自の書風を創りあげ新境地を開いた(褚法)。行書作品は王法を徹底的に研究して成り立っている。褚遂良が鑑定した王書は2

290紙にのぼり、その内容は楷書50紙・行書240紙・草書2000紙で、その目録である『晋右軍王羲之書目』を編纂した。この書は、現在でも王羲之研究の基本テキストである。

### 典型的楷書の出現(歐陽詢・虞世南・褚遂良)

六朝隸書(隸楷書)・六朝時代の楷書的隸書の影響と洗練化

褚遂良の楷書には隸意があり、折鋒の多い用筆法である。

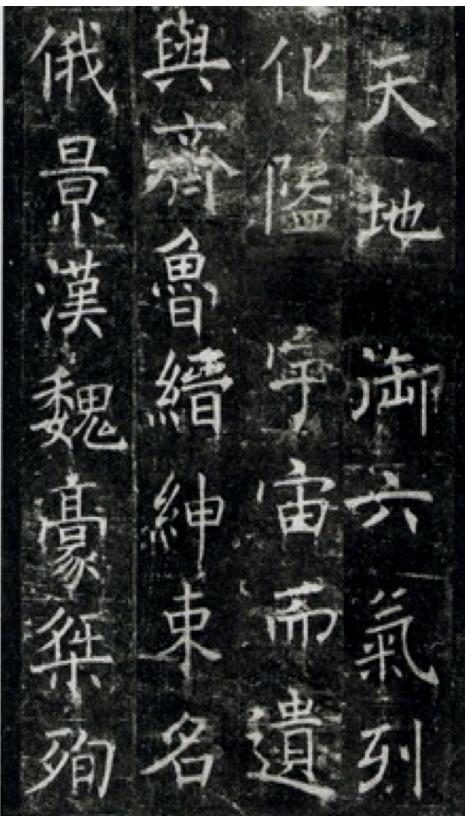
歐陽詢の影響。

「伊闕佛龕碑」→「孟法師碑」→「雁塔聖教序」の流れ

伊闕佛龕碑(641) 46歳の作



孟法師碑(642) 47歳の作 唐拓「孤本」





雁塔聖教序（永徽4年・653）  
58歳の作 最高傑作



## 特徴

(伸びやかで、粘りと鋭さを持った線質。しなやかで内に厳しさを秘めた線。虞世南の温雅、歐陽詢の厳正、褚遂良の婉美)

※虞法、歐法、王法に隸法、行意を融合し、書の歴史を背負った独自の褚法を創造した。黄庭堅は「運筆は空中に花を散らす

有り様」と称え、米芾は褚遂良の書をよく研究理解し、自己の制作に役立てた。その米芾を最も理解したのは董其昌である。

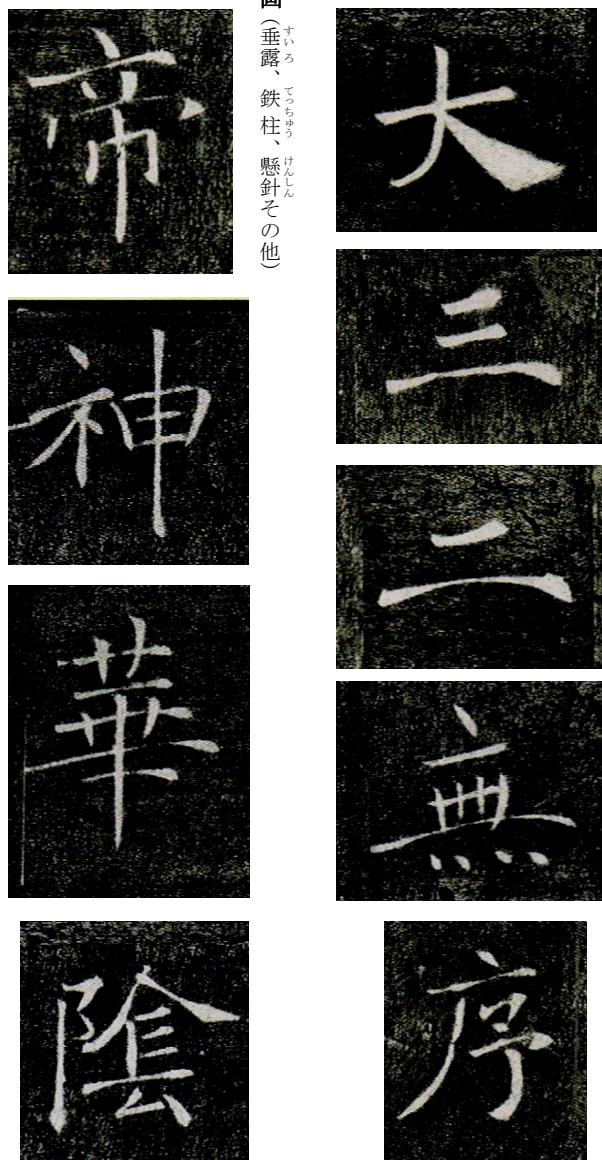
**章法** 余白の美しさ（「九成宮」は行間が通っているが、「雁塔」は字間が通っている。画と画、字間、行間の余白の美）

※余白と字画の比率は約10対1。

**用筆法** (変幻自在。俯仰法。隸法がまじっている) 多彩な表現 (緩急、太細、強弱の変化)

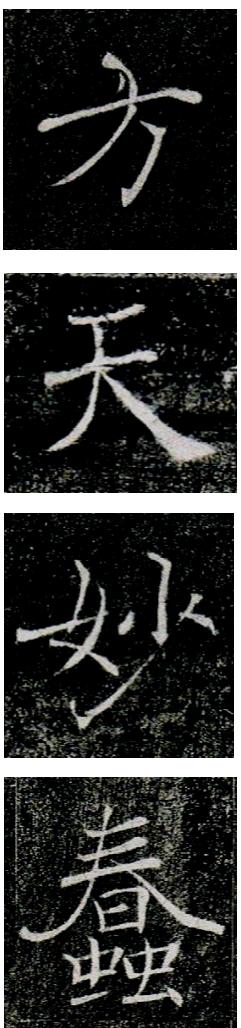
※筆は馬の毛などの剛毛筆を使用か。

**横画** (露法、藏法、逆入、入筆角度様さま) 前画を受けての起筆の変化

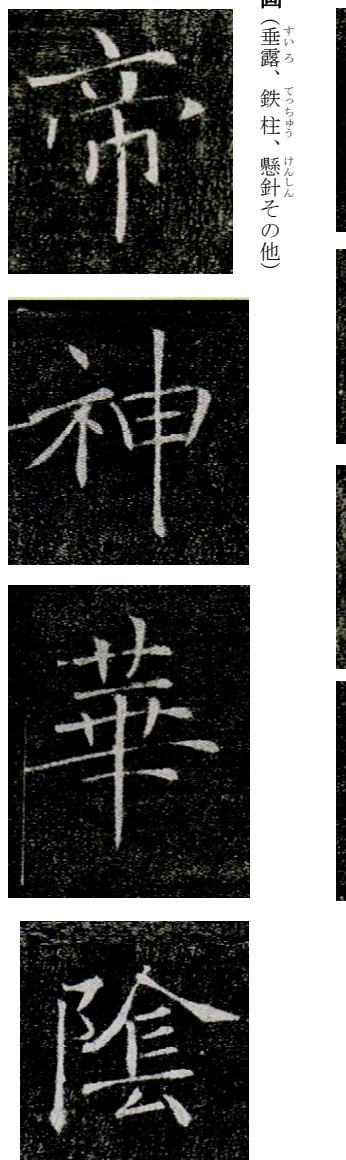


転折

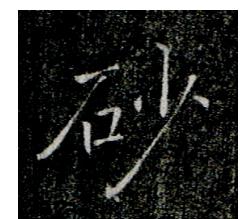
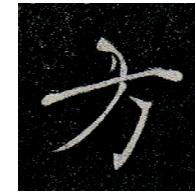
左はらい



右はらい



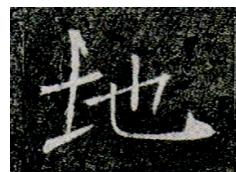
折鋒（起筆部・送筆部・終筆部に分かれている）



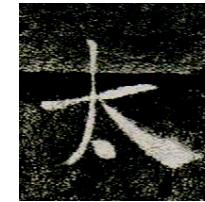
隸書の筆法



行書的な連続とリズム



はね



点（点の表現にその書の本質が見える）

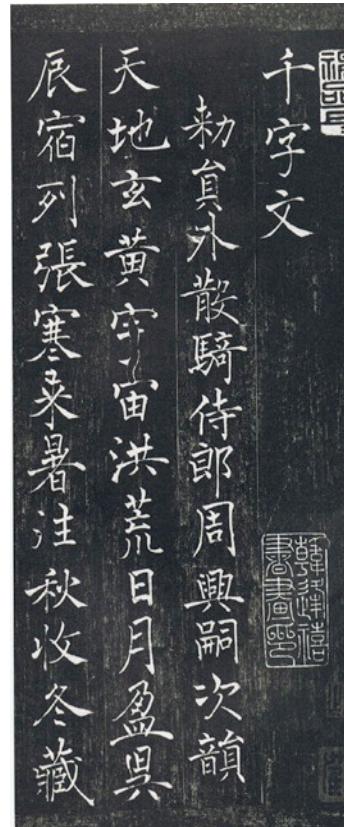
字形（外形は変形五角形。縦・横に伸びる。平行等間隔が原理だが、しんし参差の表現）

角度の変化（豊かな表情）

二つの部分に分けられる懸針



伝・褚遂良臨「蘭亭序」（八柱第二本）米芾以後の臨本？



楷書千字文（伝・褚遂良 永徽4年・653歳の作）

樂華曾舉禮葉旁垂沙塲磬翦  
斗極咸羈狼山入圓瀚諸歸池東  
旌若木西旆條支龍鄉委晝鳥  
服來儀大矣乘時悠哉利見文龜  
浮游應龍在淀濁露飛甘卿雲呈

文皇袁冊（伝・褚遂良 貞觀23年・649歳の作 行書）

枯樹賦  
殷仲文風流儒雅海內知名代異  
時移出為東陽太守常忽不樂  
顧庭槐而歎曰此樹婆娑生意盡  
矣至如白鹿貞松青牛丈樟根桓  
盤魄山崖表裏桂河事而銷亡桐



昭陵  
しづりょう

おんせんめい  
温泉銘  
貞觀22年・648  
行書碑  
唐拓「孤本」

新謂商商薄薄療療俗  
醫民鑠凍霜夕飛  
雪晨林寒尚翠谷  
暖岁春年序屢易  
暄涼幾積其妙難

神誠降德  
靈圉室  
弘都疏  
汎天潢御技

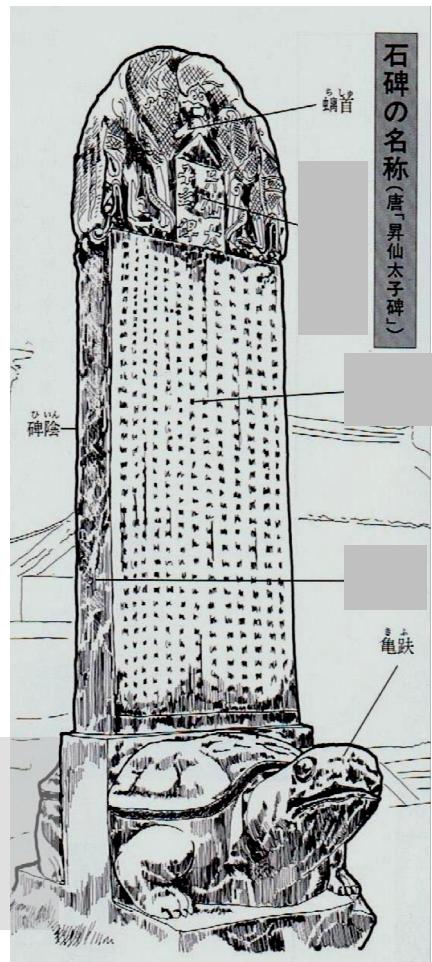


## 石碑

（「碑刻」 「いしぶみ」 「碑」ともいう）

昔、石に文字を刻むことは「神聖な行為」であつたらしい。石碑の形式は唐代に完成した。

書（原稿）・碑・拓本の関係を考えてみよう。直接石面に書くことを書丹（朱丹ともいう）という。丹は赤、朱の意。



拓本 (石や木や金属などに刻された文字や文様に紙を直接あてて写し取ったもののこと。いしすり、いしすずり、ともいう)

敦煌效懿人也  
莫先蓋周之胄  
武王秉軒之模

劫而不古  
若隱若顯

四月廿三日義  
不患多々不傾  
、より乞之



## ※避諱

諱（本名）を避けること。親や主君など、目上の人々の本名を用いることを忌避する、東アジア漢字文化圏の習慣。「実名敬避俗」といって、本名はその人の靈的な人格と強く結びついたものであり、その名を口にするとその靈的人格を支配することができると考えられたため目上の人以外の人間が名で呼びかけることは無礼と考えられた。そこから避諱の習慣が生まれたといわれる。

そのため様ざまな方法がとられた。  
同義の別字や語句に置き換える。觀世音→觀自在など。  
空欄にしたり、「某」や「諱」字に置き換える。觀世音→觀音など。

- 「改字」  
「空字」  
「欠画」  
「字」  
「号」  
「謚」
- 文字の一画を記さない。「欠字」「欠筆」ともいう。※「温泉銘」が太宗の筆跡だと判断された例。「世」と「民」成人した人間の呼び名として諱の代わりに用いられた。白居易（諱）→白樂天（字）など。  
文人知識人の呼び名として諱の代わりに用いられた。蘇軾（諱）→蘓東坡（号）吉田矩方（諱）→吉田松陰（号）死後に、功績を讃えて爵位を賜ったときには諱の代わりに用いられた。諸葛亮（諱）→諸葛武侯（諡）など。

その他「官名」などがある。

## 参考書

- 『秦の始皇帝』白帝社 1994 桦山 明著  
 『始皇帝陵と兵馬俑』講談社学術文庫 2004 鶴間和幸著  
 『マンガ孫子韓非子の思想』講談社 1990 野末陳平監修  
 『史記 I ～霸者の条件 I』徳間書店 1987 市川宏十・杉本達夫訳 「史記」は全7巻別巻 1  
 『秦漢帝国～中国古代帝国の興亡～』講談社学術文庫 1997 西嶋定生著  
 『中国の人と思想』全12巻より「1・孔子」「2・孟子」「3・孫子」「4・老子」「5・莊子」「6・司馬遷」集英社  
 『中国の歴史 03 ファーストエンペラーの遺産～』講談社 2004 鶴間和幸著  
 『中国の歴史 04 ～三国志の世界～』講談社 2005 金文京著  
 『中国の英傑 5 ～諸葛孔明～』集英社 1986 林田慎之助著  
 『三国志演義』いろいろ出版されている。
- 『魏晉南北朝通史内編』平凡社 東洋文庫 1989 岡崎文夫著  
 『万葉集』講談社文庫 全4巻別巻 1巻 1978 中西進翻訳 x z  
 『新潮日本古典集成～芭蕉文集』新潮社 1978  
 『日本古典文学全集 51 ～連歌論集、能楽論集、俳論集～』小学館 1973  
 『中國古代文明』山川出版社 2006 鶴間和幸・他著  
 『西域文書からみた中国史』山川出版社・世界史リブレット 1998、1 関尾史郎著  
 『中國史のなかの諸民族』山川出版社・世界史リブレット 2004、2 川本芳昭著  
 『千字文』岩波文庫 1997 小川環樹  
 『人物中国の歴史・6～長安の春秋～』集英社 1981 中に谷川道雄氏の「太宗」がある。  
 『九品官人法の研究』中公新書 1963 中公文庫 2003 宮崎市定著  
 『碑刻～明治・大正・昭和の記念碑～』木耳社 2003 森 章二著  
 『世界帝国の形成』講談社現代新書 1977 谷川道雄著  
 『隋唐世界帝国の形成』講談社学術文庫 2008 谷川道雄著  
 『古代東アジア世界と日本』岩波現代文庫 2000 西嶋定生著  
 『古代東アジアの民族と國家』岩波書店 1998 李成市著  
 『日本古代史と朝鮮』講談社学術文庫 1985 金達寿著  
 『中國書画話』筑摩叢書 27 1965 長尾尾山著  
 『中国の古代都市文明』思文閣出版 2002 杉本憲司著  
 『中国書人伝』芸術新聞社 1985 駒田信二著  
 『漢字学 I 読文解字の世界 I』東海大学出版会 1985 阿辻哲次著  
 『中国碑刻紀行』墨ス・ペシヤル 14 芸術新聞社 1993 阿辻哲次著  
 『図説・漢字の歴史』普及版 大修館書店 1989 阿辻哲次著  
 『中国法書選』『中国法書ガイド』各1巻 60巻 二玄社  
 『精萃・図説書法論』①②⑦ 西東書房 1987 平勢雨邨他著  
 『王羲之』墨ス・ペシヤル 9 芸術新聞社 1991  
 『書道全集』平凡社 1954 神田喜一郎他著  
 『中国碑刻紀行』墨ス・ペシヤル 14 芸術新聞社 1993 阿辻哲次著  
 『書道藝術』中央公論新社 1970 中田勇次郎編纂  
 『中国絵画のみかた』二玄社 1995 王耀庭著  
 『王羲之六朝貴族の世界』清水新書 17 清水書院 1984 吉川忠夫著  
 『書道研究』美術新聞社 1988年10月、1989年5月、1990年1月 萱原書房 1990年8月「王羲之の研究」、50号「王羲之伝」、52号「蘭亭序」  
 『墨』62号「千字文」、72号「初唐の三大家」、95号「九成宮醴泉銘」、105号「雁塔聖教序」、128号「孔子廟堂碑」芸術新聞社  
 その他多数